

情報、技術、そして無知の徳

ダニエル・C・デネット

出典：

Daniel C. Dennett, "Information, Technology and the Virtue of Ignorance", in *Daedalus* 115.3(Summer 1986), reprinted in Richard N. Stichler and Robert Hauptman(ed.), *Ethics, Information and Technology : readings*, McFarland&Company, Inc., Publishers, Jefferson, North Carolina, and London, 1998.

キーワード：

許容される無知の原理(principles of excusable ignorance)、エキスパートシステム(expert system)、高貴ゆえの義務(noblesse oblige)、理想化(idealization)、道徳的応急処置(moral first aid)

概略

この論文は前半部分と後半部分に分かれており、前半部分では「技術と道徳の関係における問題」と著者が呼ぶ問題、つまり情報技術は人間の生を荒廃させるか、という問いから始まり、「田舎の医者 の 事例」について考察することでその答え、というよりはむしろ著者の、技術の発展の方向性に対する希望が述べられている。後半部分では、現代は情報技術の発展により、我々は今までにまして様々なことに無知ではいられなくなり、そのことによって我々は今までにもまして配慮が求められるようになるのだが、それに伴って生じる現実的なジレンマに対して倫理学が応えていくべきであるということ、そして現代の情報技術の発展による現実的ジレンマは倫理学の抱えている問題を露呈させるので、倫理学自身を再考する機会でもある、と述べられている。

1、情報技術は生を荒廃させるか？

私たちは今日、技術による無限の強大化の幻想が現実になうかのような素晴らしい世界に生きている。このことは私たち技術好きにとっては都合のいいことである。技術に恐怖を感じる人は中世の百姓や、石器時代の狩人のような悲惨で絶望的な人生を選ぶだろうか？ いや、私たちは得るものに対して犠牲を払うだろう。つまり私たちの習慣を少しずつ変えたり、選択肢を狭めたり、それぞれ新しいことを採用した時の副作用として生じるささいないらだちを我慢したりするのである。これらの絶えずわずかに感じられる負債を気にしなくなるようにするのはたやすいと気づく人もいるだろう。しかしその犠牲に耐えられないという人もいるだろう。新しい技術の、より間接的な副作用のうちのいくつかの犠牲の総計が払われれば、私たちは住み方のわからない、しかし去ることもできない世界の中にいつの間にか移っていることに気づかないかもしれない、と彼らは不思議に思う。

私は技術と道徳の関係における、特定の問題点に焦点を絞ろうと思う。私は、これまでとても大きな恩恵であった情報技術は、もし私たちが長いこと支えてきた伝統からの相当に根本的な部分からの出直しを考え出さなければ、今日の私たちの生を荒廃させるかもしれない、という可能性について熟考してみたいと思う。

私たち全ては、少なくとも二つの意味においてよい人生を歩みたいと願う。私たちは楽しく、

興奮するような、充実した、幸せな人生を歩みたいと願う。それとできる限り道徳的によい人生を歩みたいと願う。これまで技術がいやな仕事や辛さから私たちを解放し、私たちの多くにそれ以外の部分の人生を改善できるようにしてくれることによって、そういった二つの願望をかなえることを容易にしてくれたことは間違いない。しかし私たちがある問題の解決策を見つけられなければ、そのカーブは降下し始めるだろう。私たちはこれら二つのゴールの両立 (*joint realization*) をよりありえなくさせるような技術の発展段階の一点にたどりついているのである。

技術が私たちに新しい知識を要求するならば、その知識はこれまで私たち個人個人の行動を導いてきた基準を時代遅れのものにする。例えば田舎の医者について考えてみよう。技術は彼らの医療治療のスタイルを今にも時代遅れのものに、そしてその時代遅れゆえに、道徳的に弁護の余地のないものにしようとしているのである。医療診断のためのエキスパートシステムが利用できるようになれば、それらの医者たちは新しい技術を利用するかどうか決めなければならない。そのシステムは実際に、平均的な医者なら遭遇するであろう様々な医療事例の中からある疾患に対する迅速で信頼できる、そして正確な診断を下すだろうか。

もしそうだとすれば、その医者たちはどう考えても選択の余地はない。彼らは新しいエキスパートシステムを導入しなければいけなくなるだろう。正確な診断を確保するための最善の手段を備えないのはまったくの職務怠慢であろう。

医者たちはいつも最新の医療を備えておかなければならなかった、そして例えばより新しい方法をとるために医療雑誌などと同じ水準を保ち続けるというかなりの努力をしなければいけないという義務に応じてきた。今までは、田舎の医者たちは、彼らの都市部の同業者ならできることを全部知らなくても許されてきた。

ほとんど隔離された田舎の医者にとって許容される無知の基準 (*standards of excusable ignorance*) は変わるだろう。全ての医者は、今ではきちんと清潔であることが求められるのと同じように、新しい技術を備えていることが求められるようになるだろう。私たちはエキスパートシステムによって医者たちがはるかによい医療ができるようになると思うかもしれない。しかしこうしたシステムを使うためには、彼らは以前重んじていた仕事のやり方のいくつかをあきらめなくてはいけなくなるだろう。

現在は、田舎の医者たちは彼らの患者たちについて推測するのに、様々な、くだけたやり方をとることもできる。しかしエキスパートシステムはこれら全てを変えるだろう。医者たちは一連の質問を全ての患者に聞かなければいけなくなるだろう。それは以前は、何のために聞くのか、その必要性を全く感じていなかった質問である。彼らは、以前はしなければならぬとは感じなどしなかった様々なとても簡単なテストもしなければならぬだろう。なぜならそのようなデータによってエキスパートシステムの出す答えが有効な結果を生むことを恐らく証明しているであろうからである。質問をして簡単なテストをするという二つの方法によってできる限り簡単に、そして確実に情報を集めることができるだろう。それゆえ、その方法はできる限り形式的なものであろう、というのはそれがより型にはまったものであり、エキスパートシステムの出す答えというのはより画一的なものであり、それゆえウソを教える可能性がより少ないものになるからである。

この点において、診断の「技 *art*」、患者の実情 *patient's history* を診る「技」は、指図に従うだけの能力に取って代わられるだろう。私は、そのようなシステムは想像力にとんだ、そして実

に器用な診断や研究を意図的に抑圧することに肯定的な価値を置くであろう、と述べているのではなく、そうした活動は、全てのお決まりの質問をして全てのお決まりのテストをするという医者
の義務を果たした後に、なお残された余白へと追いやられるであろう、と述べているのである。

医療（と一般的には技術）における「進歩」は、技術を支配している原則が十分に理解され、
規則的に整理されうるならば、技術をお決まりの作業に置き換えることによって発展しつづける
ので、医療診断の技術が成功する限り、そして明らかに信頼できるのでそれを医者たちが使わざ
るを得なくなる限り、それを使う医療作業員たちの通常の、毎日の貢献を少なくさせることによ
って、その進歩は続くだろう。かつて一時期、熟練した医者は彼（彼女）の技巧を駆使し、技術
の持つギャップを埋めることによって生命を救うことすらできる瞬間を見出せたのだが、そのよ
うな機会は技術の改善に従いより珍しくなっていくだろう。このように、診断の責任をエキス
パートシステムにどんどん任せるような新種の医者によって、医者の亜種は絶滅するのである。

私たちは実践者という種の消滅を嘆くべきだろうか？ もし私たちがその医者たち独特の視点
に立つなら、彼らがこの発展を悔やむのももっともであるとわかるだろう。それは彼らの人生を
よりつまらなく、より重要でないものにしてしまうだろう。彼らは、観察したことをまとめてコ
ンピュータに読みとらせて、システムの指示で治療を実行するという、単なる患者とシステム
の間の仲介人としての役割に埋もれていくだろう。

この社会的役割の消滅に似たようなプロセスは歴史上にもある。芸術家、書家、焼き物職人、
仕立屋などは、以前は今よりも共同体にとって無視できない存在だった。今でもそのような芸術
家たちの役割はあるが、それは贅沢さに関する役割である。ある人たちは特別で個人的で芸術
的なタッチに喜んでお金を払うのだ。しかし機械で作ったものより手作りのものの方が喜ばれる
ような領域というのは、ほとんど純粋な儀式のような、もっといえばかつての神秘的な名残のよ
うなもの領域にまで小さくなってしまっている。

身の回りにかかりつけの魅力的な医者を持つ愚かな金持ちは、ある特徴を見出すかもしれない。
アパートのドアマンと未来の医者を比べてみよう。門番（ドアマン）は、今日ではほとんど純
粋な儀式的な機能をもっている。タクシーは電話で気軽に呼べるが、親切なドアマンがドアを開
てくれるのはそうはいかない。そして彼の24時間の見張りや警報システムというセキュリティ
は通常はほとんどよけいなものである。しかしドアマンをもつことは見栄えがいい。彼はある
種の個人的なタッチを与えてくれる。とても裕福で大の大人が制服を着て毎日笑顔を振りま
きながら立っているだけのお金を払う余裕があるということは全く優雅である。ドアマンの
仕事はよく考えると楽しいものではない。それはどんなに言い繕っても、人間的なサービスの
パロディなのだ。

全ての医者は、彼（彼女）は健康管理のドアマンになろうとしていることを心配し始めな
ければならない。将来、今の医者がしなければならないのは最低限のコンピュータリテラシー
とベッドサイドマナー（医者の患者に接する態度）だけになるかもしれない。

エキスパートシステムの擁護者は、エキスパートシステムが決して医者という職業の命を縮
めるようなものではなく、むしろその価値をより高めるものだと言いたがるだろう。医者は、
いやな仕事やテキストについてのうろ覚えの知識や医学雑誌について考える曖昧さはなくなる
から、患者と個人的に付き合う機会をより多く持ち、より多くの人に効果的な治療をす
ることができるだろうから。実際、今日のアパートのドアマンは昔ながらの接客係
(conciierge)のように、より多

くの住人たちと個人的に付き合うことができる。というのも、あらゆるいやな仕事は彼の人生からまったく取り除かれるからだ。ドアマンは確かにそのような単調で退屈な仕事から解放されるだろう。しかし、責任やチャレンジ精神、そして自律性なども失ってしまうだろう。猫のチェンジャーのように、あるのは笑顔だけである。診断と治療の責任はいつの間にか医者のものでなくなってしまう。そしてエキスパートシステムの中に組み込まれるのである。医者たちも、それと同じように、役割の縮小に苦しむだろう。

医者たちはまさに彼らができる最高の医療を実践したいと願うゆえに、そういう選択をすることが彼らにとっての義務であるとみなすであろう。彼らは現在利用できる技術によって生命を救うことをより信頼できる効果的なものにすることが実際にできるのだということがわかるだろう。彼らが歩んできた楽しく、リスキーな人生はもはや道徳的に弁護できるものではなくなるだろう。責任を持って最善を尽くしたいと思うゆえに、彼らは今までよりは面白くないサービスをしなくてはならなくなるだろう。はたしてそれ以外に、医者にとっていかなる未来があるだろうか？

一つは、エキスパートシステムの技術が結局はうまく機能しないかもしれない、というものである。私たちはエキスパートシステムが有限で信頼できないものだと知り、医者たちはまず自分を頼りにし、一人でいろんな事を知っていて、非常に巧みな技巧を備えている人でなければならないだろう。恐らく彼らはそのエキスパートシステムを使う義務さえないだろう、そしてそれが信頼に値しないものであることが証明されるだろう。

他にもいくつかの方法がある。もし技術が機能すると考えたとしても、そして今日の医者 of 人生を守ることを最も重要なことだと考えれば、この未来を避けるための一歩を踏み出すことはできる。例えば、ラッドライト（技術革新反対者）がエキスパートシステムを見つけるたびに壊していく作戦によって、あるいはまず技術の発展や改善を禁止したり妨げたりすることを試みることによって。しかしラッドライト運動はいまだかつてうまくいったことはない。それは悪化した危機的状況を先延ばしするだけで、今日その信念を応援してくれる人たちを奮い立たせるものではない。

もう一つは、医者たちが最善の医療を実践するという誓いを私が過大評価していた、ということである。数人の評論家によれば、多くの医者たちは新しいエキスパートシステムをいいかげんにしか受け入れてない、なぜなら彼らは相談役との「おしゃべり屋」であることや、借金を先延ばしにすること、診断の助手を雇うことの方がよっぽど気になるからである。もしそのようないかげんさが広まれば、一般市民がエキスパートシステムの価値に気づくことはできず、それを使う義務があるかどうかはあやしいものであろう。

最後に、当然、20世紀半ばの医者 of 役割を守ることは結局、新聞製版のライノタイプ（自動植字機）の技師 of 役割を守るのと同じくらいくだらないものだと気づく、ということもあるだろう。これらの役割は多分、私たちがその立場にある人たちの労働状況を楽しみ、新入社員の募集を抑制する限り消滅せざるを得ないし、特定の個人にはほとんど害はないだろう。将来、人々は間違いなく今よりもましな仕事につくだろう。

このような状況について再検討してみよう。もし医療のエキスパートシステムが期待通りに生き延びるとすれば、その発展の伝統と現在の軌道は、それが現代の暮らしの多くの楽しくて充実感のある職種の一つを廃れさせるであろうことを示唆している。完全に破壊するのではなく、次第に大部分を失わせるだろう。人生においてよいことをしたいのではなく、よい人生を送りたい

と願う人々は、このサービスの一部分に取り込まれる前に2回考えるだろう。おそらく医者役割は維持される価値のあるものではないと考えるか、あるいは、恐らくエキスパートシステムはその威力を全く証明できないので、医者たちは彼らの責任を明け渡す必要もないだろうと考えるか。さもなければ、エキスパートシステムが確立されえないという希望において、私たちは暴力的あるいは立法的に、その展開を未然に防ぐための第一歩を踏み出すであろう。

私はさらに二つの可能性を見出す。一つ目の、最もありえそうな結果は、私たちが両方の場合についての最悪のケースに直面することである。つまり、エキスパートシステムは医者たちが信頼せざるを得なくなるほどまでには十分に機能せず、しかし医者たちは、一般市民のあまりに楽観的な考え方や医者たち自身の自信のなさ、さらには怠惰や強欲、そして一連の医療ミスへの恐怖のプレッシャーに負けて、それでもそのシステムに頼るようになるだろう。二つ目はいくらもありえなさそうなものだが、努力してみる価値はあるものである。すなわち、私たちは賢い、自分を頼りにしている医者のみを支援するようなコンピュータシステムを構築できるだろう、というものである。私たちは診断の力を犠牲にすることなく、それぞれの医者の貢献を維持し、できれば高めるようなシステムを作り出すための法則を探し出すべきである。私はそのようなシステムを作ることは不可能ではないと思うが、簡単ではないだろう。それは構築の基本的な部分についての再検討を要するであろうからだ。

エキスパートシステムを楽器と比較してみよう。今日のエキスパートシステムは、誰でもそれを使えるようになり、ある程度までは簡単に上達できるように作られているオートハープと似ている。私たちはそうではなくむしろシステムをバイオリンかピアノのような、無限に広がり個人の能力に挑戦するような道具に発展させようと試みるべきである。

私たちは例えば集団遺伝学とコンピュータに特有の内部構造のような複雑な現象についての研究のためにいくつかの異なる「概念的ピアノ」を作り出している。もし私たちのアイデアが現在の試みを続けることができれば、それに続いて私たちはエキスパートシステムの構築に関する新しい哲学のための第一歩を踏み出すことができるかもしれない、しかしその間にも、これらの問題に対してなされるべき、そして私が研究しつづけるべき多くの哲学的課題もある。

なぜ医者たちは、彼らが退屈という駅へと向かう義務の列車に乗っていることに気づくべきなのだろうか？ この特有の現象を理解するためには、私たちは立ち帰って、情報技術と私たちの決断的行為としての倫理的生の関係についてより幅広い視野を持たなくてはならない。

2、無知の基準の変化は何をもたらすか？ ～倫理的原理の再考～

私たちの先祖は、私たちに比べれば、様々な認識の手段に関しては貧しかった。ローカルでない、あるいは目下のものではない影響や問題について知るための手段はほとんどなかった。だからこそ彼らは計画を立て、多くはないが手におえるローカルな知識の蓄えを基礎に置くはつきりとした良心によって行為できたのである。このようにして彼らは有徳な人生を送ることができたのである。そしてその徳は避けがたい無知に由来するものである。現代の技術は私たちからそのような無知に由来するある種の徳を奪っている。というのは今日では無知でいることなどできないからだ。情報技術は私たちの知る機会を増やしている。そして私たちの伝統的な倫理的教えは、知る機会が、知らなければならないという義務に変わることによって私たちを圧倒するのである。

私たちは「許容される無知の原理(principles of excusable ignorance)」を常にもっている。伝

統に従えば、私たちは常識を知る義務があるし、それに加えて医者や教師のような特化された社会的役割に従事する人たちにとっての常識や、私たちの特別な瞬間的な状況にはっきりと直接に関係するような知識について知る義務がある。

知識の量の荒削りな限度は人間の能力の限界による怠慢によって固定化された。頭の中にあまりにも多くの情報を詰め込むことは期待されなかったし、その時にある行動の長期的な影響を計算することも期待されなかった。医者や教師の例は、特化された領域において技術と知る義務がどのように相互作用するのか、ということの部分的には示したが、その常識への影響はさらに情け容赦なく、計り知れないものでさえある。

常識は、かつてそうであったほど相対的に持続的で惰性的なものでは決してない。知識がすぐに手に入る場合、手に入れる義務を持たずにいることができるだろうか。知る義務という罪の重荷はあらゆる学術的な場では重くのしかかってくるが他ではやさしいものもある。そしてその知る義務は、もし私たちが読むべき本を全て読んだら他に何もすることがなくなるような状況を作り出す。科学とマスコミのおかげで私たちは、バックする時に車の後ろに誰も立っていないかどうか心配することに加えて、自分の車を運転する（あるいは車を買う）ことの大气汚染や酸性雨、国内あるいは国際経済などなどへの影響についても考えなくては行けないのだ、ということを知っている。

情報過多は、それに対処しなければならず、そしてそれを利用したいと思う人たちからの多くの反応を引き起こしている。誰も全てのこのような情報についていけないということは誰でも知っているのも、技術による変化、計画による変化、そしてまたそれによる構成の変化、さらにそれによる駆け引きの変化が生じている。私たちが今義務付けられるような常識はほとんど全員がほとんど瞬間的に利用できるものの全体ではなく、むしろ「旬の話題」と呼ばれるような常識の小さな、変容していく核心である。

今ある情報が多すぎるので、少しの使いやすさは見分けのつかなさほとんど変わらない。出版される本のほとんどは読まれないし、読まれることはその有益さを保証するものでさえない。このことはより高位の影響に由来する。本は再考されるだけではなく、（再考されることによって）例えば本を読む上での良本リストに含まれなければならないのである。もしより高位の組織で十分に目に見えるようになるなら、読まれてためになる必要もない。この情報のフィルター、コピー、増大化はドタバタ競争の産物であり、そのような過程がおおよそ楽観的なものである、ということを考える理由にもならない。反対に、情報機器の価値と、公共の環境を利用し社会でそれを再生産するためのそれらの能力との間には、恐らく貧弱だが直接的な関係がある。

リチャード＝ドーキンスはその傑作『利己的な遺伝子(*The Selfish Gene*)』の中で、彼がミームと呼ぶ概念、「人間の文化のスープ」の中に住む「新種の複製子」を紹介している。ミームは、おおよそ見当をつければ、特許をとったり著作権を持ったりできるかもしれないある種の特定の形式をもつ概念である。

楽曲や、思想、標語、衣服の作り方、壺の作り方、あるいはアーチの建造法などはいずれもミームの例である。遺伝子が遺伝子プールの中で繁殖するに際して、精子や卵子を担体として体から体へと飛びまわると同様に、ミームがミームプール内で繁殖する際には、広い意味で模倣と呼びうる過程を媒介として、脳から脳へと渡り歩くのである。（『利己的な遺伝

子』日高敏隆など訳、紀伊国屋書店)

ドーキンスが示すように遺伝子とミームはよく似ている。彼の言葉を使って私の議論を言い換えると、いくつかの技術的ミームによって私たちは、圧倒的な数の寄生動物であるミームの人口爆発に突入している。もし私たちがいくつかの新しいアイデア、新しい抗原に対する新しい抗体を見つけられなければ、私たちにとって辛い時期が来るだろう。私たちが必要としている新しいミームは、新しい技術ではなく概念的革新なのである。

この過多による困惑を作り出しているのは技術なのである。他の星にいるかわいそうな人々について考えてみよう。宇宙の他の場所に生命が存在することは十分に考えられるし、それが非常に悲惨な生活をしているということも同じようにあり得ることである。しかし、他の星でのほとんどの衝撃的で身の毛もよだつような惨事は、幸い私たちには全く関係ない。例え私たちがそれらについて知っていたとしても（しかし幸いなことに私たちは知らないのだが）、それらに対して私たちができることなど何もないだろうからである。

そんなに昔の話ではないが、天文学的あるいは生物学的な時間の単位で計れば、他の惑星が私たちの惑星から遠く離れているのと同じくらい、西半球は東半球から遠く離れていた。19世紀に入ってからでさえ、自分たちのローカルな共同体から離れたところにいる誰かや何かのための、はっきりした義務があるということを思いつくほどの知識や力を持っていた人などほとんどいなかった。普通の人々が遠く離れた場所の人たちの暮らしに多大な影響を及ぼすことなど、当然ながら考えられなかったし、それゆえそんなことを心配することもなかった。

しかし強大な力や知識をもつ少数の人たちは、彼らの無力さの傘に隠れてはいられないと思った。彼らの態度は「高貴ゆえの義務(*noblesse oblige*)」というスローガンによって表現された。その高貴な生まれは特別な義務を持っていたのである。そのスローガンはもともとはそのような少数の人たちに当てはまるものだったが、その考え方はその後、相続されたものであるにしる獲得されたものであるにしる、力を持つ人全てに拡張されるようになった。彼らの「高貴さ」に払う代償は、毎日の食料と住居をなんとかするためにばかり従事しないという大きな意味において、拡大された社会的な目的であった。19世紀において、教養のある人たちなら誰でも、例えば奴隷制度を廃止するという立場にたつべきかどうかというような、様々な決断を問うことができた。彼らの努力は実際、奴隷制度を無くすことに成功した。

私たちは今ではみんな高貴なものなのだ。私たち全ては、ただ生き、私たちの家族を養うだけでなく、より大きな目的のための時間や労力、知識、そして力などについていやになるくらい贅沢なのである。技術は私たちに知り、行為するためのおびただしい機会を作り出している。私たちはこの恵みに対して責任を持って対処していきたいと思うのだが、どうすればいいかわからない。私たちがすべき努力の中で何が優先されるべきかという問題について考えると、私たちは今ある情報におぼれ、正しい原則に基づいた決断ができないのである。それ故結果的には、非常に奇妙な選択になるかもしれないが、どちらの訴えがもっとも価値があるのか計算できない、計算する時間もないという理由のために、消極的でどんな訴えも無視するような人の選択に比べれば、ほぼ間違いなくましであろう。

この実際的なジレンマについての考えられる解決策は、哲学から、もっといえば倫理学から与えられると考えられるかもしれない。しかし、私はヒューマニストたちも答えを持っている、あ

るいは少なくとも答えを生み出すべき研究計画を引き受けているといたいものだけでも、このようなやっかいな道徳的問題に対して、専門的な哲学者たちからはまだほとんど直接的な関心が向けられていないことを報告しなければならない。

この理由を見つけるのは難しくない。科学における理論上の活動のように、倫理学はいつも理想化の助けを借りて遂行されている。現実には、ごちゃごちゃした細部の故に直接理論化するには複雑すぎる。倫理学の得意の理想化は、倫理的決断の際に無限の知識と時間しか持たない道徳的行為者の都合のいい神話である。例えば、各種の功利主義のような結果主義者の理論は、為されるべきことはいつでも、あらゆることを考慮した上で期待される最善の結果を生むであろう行為の手段の全てである、と明言する。結果主義者たちはあらゆること、関係していることでさえもその全てを本当に考慮できる者など誰もいない、ということ十分にわかっているのだが、それでも彼らは、彼らの理論が、理想的反省と良心的判断はあらゆることを考慮した上でなされる、というものであることを表すのである。

それはまるで二つの説があるかのようなのである。それはつまり、あらゆる状況において何をなすべきかという原理を計算する仕事を引き受けるという文字通りの倫理学と、あまり面白くない、「単なる実際上の」道徳的応急処置、哲学の先生が来る前に何をするか、の原理、つまりおおざっぱにいつてしまえば、時間的制限がある中でどう決断すればよいかに関する原理とである。

倫理学の伝統的な理論は全て、標準的な理想化によって無視された、まさにその葛藤要素に依存しているか、浸りきっているのではないだろうか。情報技術は、その葛藤を取り除くことによって、倫理学の健全さのために見過ごされてきた多くの弱点を露呈させることにつながる。

ここでは一つの批判に答えるにはあまりに問題が大きすぎるが、私は少なくとも私が今心に抱いている問題を描けるだろう。私たちはいかにして道徳的応急処置マニュアルを書くことができるだろうか？ あるいは、そのマニュアルをより工夫を凝らしたもの、リアルタイムで道徳的アドバイスを与えてくれるエキスパートシステムにすることができるだろうか？

そのようなエキスパートシステムの空想は、しばしば倫理学理論の影に潜んでいる。「もし私の為すべきことが最大の功利を生むことを期待されるものだとしたら、今この地上でいかにしてそれを計算できるだろうか？」この問題は100年以上もおなじみのものであった。そして道徳哲学者による標準的な反応は、当時の技術からの比喩を拝借したジョン＝スチュアート＝ミルによって著される。

誰も船員が航海暦を計算するいとまがないからとて、航海術が天文学に基づくものではないなどと論ずるものはない。船員は理性的動物である以上、あらかじめ計算されている航海暦をたずさえて航海に出かける。それと同様にすべての理性的動物は、ふつうの正邪の問題についても、またそれよりはるかにむずかしい賢愚の問題のうちの多くのものについても、あらかじめ意見を決めて、人生の航海に乗り出すのである。(『功利主義 Utilitarianism』和田聖嗣訳、ロゴス新書)

それはミルの時代と同じくらい今でも素晴らしいアイデアではあるのだが、その比喩は誤って私たちを、そのときの技術を使うことで実際に将来の天体の位置をあらかじめ計算できるかもしれないという事実を見過ごさせるのである。人生の荒れた海の中で道徳的選択者を導くような道

徳の暦はどこにあるのだろうか？ ミルと同時代の人、ジェレミー＝ベンサムは説明するために「快樂計算」を編み出した。今では誰もそれを深刻に受け止めないが、その奇妙で面白い時代遅れのものの末裔は今でもまだ生産され、仕上げられ、とりわけ、哲学者によってではなく「費用便益分析家」やコンピュータ設計者、他の未来学者によって宣伝されているのである。

哲学者たちはいまだに簡単に見過ごしているとしても、コンピュータ科学にとってはっきりしているであろうことは、あらゆる一般性を持った信頼に足る、権威ある結果主義者の暦を実際に作り出すという考えは、今もそしてこれからも、単なる理想だということである。そのようなシステムに要求されるスペックと、現在よく知られているはるかに単純な予想して問題を解決するような機器とを比べてみよう。例えばリアルタイムの短期天気予報はあえて少数の測定基準ときめの粗いデータ評価表、そして比較的単純な方程式を使うことによって信頼に耐えうるレベルまでになっている。ただ世界で最速のスーパーコンピュータの能力を使い果たしてしまうが。何ヶ月も先の詳細な天気予報はおそらくどんな状況でもコンピュータにより手におえない。もしそれが手におえないものではないということがわかったとしても、それはただ小気候効果がやはり無秩序には増殖しないということが証明されるだろう、という理由によるものだろう。しかし、多くの毎日の経験から私たちは、例えば数人の知られざる人々のタイムノールに対する嫌悪感などのような、「小社会」効果は最も信頼のおける人間的な計画と社会的情勢において大きな混乱を生じさせることができる。

その予測の問題がどうか飼いならされたとしても、見積もりの問題が残るだろう。チェスのプログラムにおいては、いつ予測をやめて最終的な配置を見積もるかという問題は、いつもせわしない動きを見て最終的な見積もりを比較的静止した盤上の配置が得られるまで引き延ばすという、静止の原理の枠組みへとつながっている。簡単なことではないがこの満足できるチェスの戦略は、私たちに道徳的なアドバイスを与えてくれるものを構築することに体系的に適用できるものではない。それはスリーマイル島効果と呼ぶことができるものによる。スリーマイル島でメルトダウンがあった頃からは比較的静かな年が数年続いている。しかし硬貨を上を放り投げるよりは自信を持ってこういう事ができるだろう。それはよいことの内の一つが起きているのか、それとも悪いことのうちの一つが起きているのか、と。もし私たちが想像しているシステムがその可能性 p の将来的な方向性の終末としてスリーマイル島を指し示すようなものであっても、そのシステムはその事件に高い、あるいは低い功利を設定すべきだろうか？ この問題は当然、人生においてチェックメイトはないということであり、導かれている、あるいは導かれていない道筋に沿って伸びているもう一つのもの実際の価値を反対の分析をすることで計算できるようなものからある最終的な結果、あるいは他の結果を算出するような将来における有限的な定点などない、ということである。すなわち、私たちが作ったエキスパートシステムのプロトタイプのパラメーターを調整する方法など、やはりイデオロギーとご挨拶の革新の他にはないし、ないのかもしれない。

結果主義者の理論が体系的に実行不可能なものであるという疑念は何ら新しいものではない。その疑念は100年以上にわたってカント派と呼ばれる、あるいは義務を基礎に置いた倫理学を支持してきた。『ペンザンスの海賊』の中で自称「義務の奴隷」であるフレデリックに対して、海賊の親分はこういう。「いつでもお前の良心の命令に従うんだぞ、あとは一か八かだ！」問題はそのような義務に基礎を置いた理論は、ペンザンスの海賊の中でフレデリックは融通がきかな

いのでへまをしてしまうのだが、そのようなこっけいで奇妙な結果をいつも導くわけではない。だがそのような理論が安定した説得力のある行為のレシピになることはほとんどなかった。カントが道徳的応急処置マニュアルに載るべき唯一のルールとして意図的に表現したといえるカントの定言命法は、今日ではベンサムの快樂計算と同じくらい繊細で実際的でないように思える。

しかしそれは正しい方向への一歩ではあるし、その目新しさはリアルタイムで役に立つ決断が要求されることを免れないような状況への対応としての、結果主義に取って代わるこれらについて、人間の知性を通して、再考するチャンスにある。この観点からすれば、例えば、倫理的原理の正当化や擁護としてみなされるものは著しく変化する。私が思うに、このことは哲学における期待できる研究計画を切り開くし、それはその工学的見地からの単なる専門用語以上のものを得るだろう。

第一の一般的な結果はこのように訴える。倫理的決断についてのどんなシステムも、全く内容に中立でないような限界によって制限されざるを得ないので、例え誰かが何を宣伝したとしても、技術的なブラックボックスの神のお告げがあなたの倫理的な問題について法則化された客観的で信頼できる回答をあなたに与えてくれることは決してない、ということを私たちは既に知っている。選択肢が、片方は「自分で危ない橋を渡る」、もう一つは「代わりに他人に危ない橋を渡ってもらう」というものの場合、あなたは責任と楽しさの両方を保持する資格がある。

(宮田 健一)